

四肢骨は北部九州タイプの方が西九州タイプよりも相対的に大きく頑丈である。これは農作業が狩猟活動よりもはるかに重労働であることに起因していると考えられている。

このように、同じ稲作農耕を行う「弥生人」のなかでも、渡来人と縄文人との混血の度合いは地域によって格差があった。しかし、この格差も二〇〇年余りを経過して稲作が列島各地に受容される中期になると払拭されていくようになる。

二 道具と製作技術

弥生時代は稲作農耕という縄文時代にはなかった生業が普及したことから、これに伴う新しい道具が伝来し、改良されるようになる。それは土器・石器・木器・金属器などさまざまな素材の道具に及ぶが、ここでは用途ごとに概観していく。

土 器

明治十七年（二八八四）東京本郷区弥生町の向ヶ岡貝塚で従来の縄文土器とは違う赤焼きの土器が発見された。この出土地の名称から弥生土器の呼称が誕生した。弥生土器は縄文土器と同様に、轆轤ろくろを使用せずに粘土紐を積み上げて成形し、六〇〇〜八〇〇度ほどの温度で野焼きして製作するもので、それ以前の縄文土器に比べて明るい赤褐色ないし茶褐色を呈する。

弥生土器の製作技法は、壺では表面をヘラ状の工具で磨いたり、指や皮などで横方向になでたりして表面を仕上げる場合が



写真2—4 弥生土器の器種
1 - 壺、2 - 甕、3 - 器台、4 - 高杯

多い。また、甕の外表面は木の板でならされるため、刷毛目はけめと呼ばれる木目の細い並行線が付いている。

弥生土器の器種は壺・甕・高杯・鉢が基本的なセットで、器台・蓋などの他、北部九州では成人用の棺に大形の甕を使用している（写真2—4）。壺は粃や米などの穀類や食料の他に水・酒などをたくわえる土器である。器形は無頸壺・長頸壺・広口壺・台付き壺・瓢形壺などさまざまなバリエーションがみられる。北部九州の前期の土器は板付式土器と総称されるが、壺は外面を赤く塗って磨き上げたり、胴部上位の肩部にヘラや二枚貝で平行線・綾杉・山形・重弧文などの文様を施すものが多い。頸部はしだいに細くなり、口縁部が小さく外反する。中期の代表的な土器である須玖式土器は、各器種とも実用性に富んだ精巧な器形となる。壺は文様がなくなり、頸部が大きく外反して、口縁部が水平に開く。後期になると壺は頸部の外反が小さくなり、口縁部は直立し波状文などを施し、終末期に近くなると底が平底から丸底へ変化する。

甕は外面に火熱を受けて煤が付着したものや、内面に飯や粟粒が焦げ付いたものがあり、炊飯などの煮炊きに使用されたことがわかる。大形の甕には水甕として使用されたものもある。北部九州の前期の甕は胴部上位に突帯や沈線・段などをめぐらすものが多く、口縁部は小さく外上方にのびる。口縁部や胴部の突帯には刻み目を施す。中期中ごろになると口縁部が水

平に近く開くようになる。後期では胴部の中位から上位が膨らみ、口縁部が「く」の字状に外反する。胴部中位や口縁部直下に突帯をめぐらすものがある。

高杯や鉢は食事に使用された器で、祭祀の際には供献物を盛る器として使用されている。高杯は中期に最も機能的な製品となる。脚部が長く、下端が大きく開き、杯部との境には突帯をめぐらす。杯部はわずかに内湾しながら外上方にのび、口縁部が水平な平坦面をなす。山陽地方中部では墓前の祭祀専用の器台で、高さが一層前後に達する特に大形のものがあるが、これには直弧文と呼ばれる特殊な文様が施されている。

土器にはほかにもタコを捕獲するためのタコ壺、焼き塩を生産するための製塩土器などが海岸部の遺跡から出土することがある。

北部九州の中期の墓地では高さ一層に達するような成人用の大形の甕棺が使用されることが多くなる。また、墓前祭祀に使用される丹塗磨研にぬりまげんの壺・高杯・鉢・器台は弥生土器を代表する極めて華麗な土器である。

農 耕 具

農耕具（図2—40）には木器や石器があるが、中期から後期になると鉄器が普及していく。水田の土を掘り起こす作業には木製の鋤や鍬が使用されるが、後期には鉄製の刃先を装着することで、深く耕すことが容易になった。鋤（図2—40・6〜10）は長い柄の先端に一直線に刃

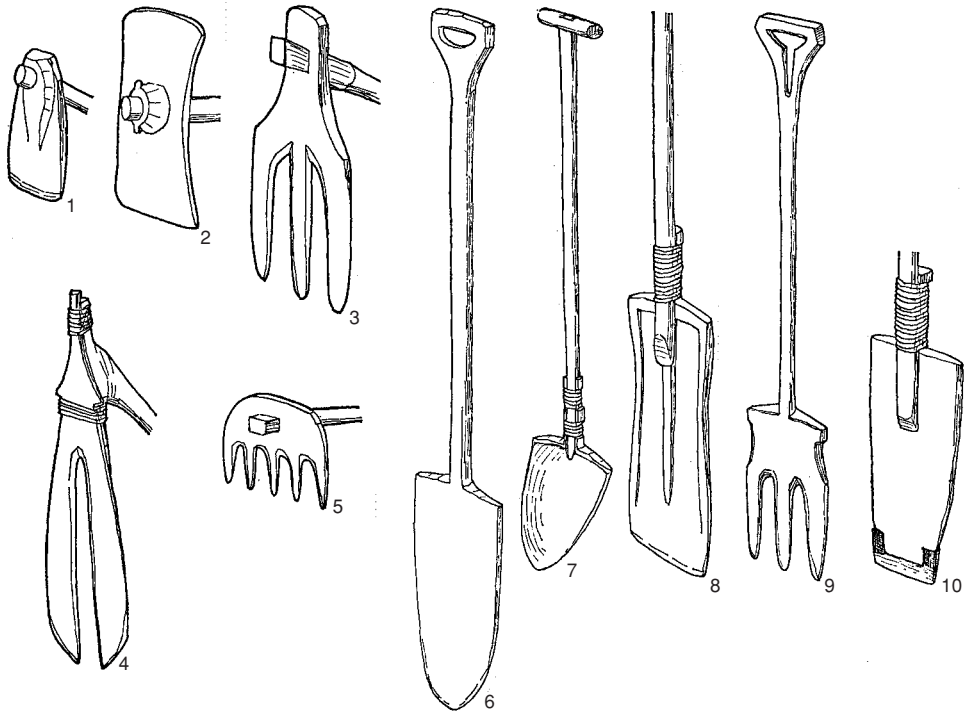


図2—40 農 耕 具

が付くスコップ状の形態をなす。鍬(同・15)は柄に対して直交ないしは斜交する方向に刃が付くもので現在の平鍬とほぼ同じ形態である。刃先は二またや三またにわかれるものがある。鋤や鍬の素材となる樹種はアカガシ・アラカシ・イチイカシなどの堅牢な広葉樹が多い。後期になると田の表面を平らに整えるえぶりや深田へ堆肥を踏み込むための大足、深田のなかを歩くための田下駄が登場する。

稲の収穫には穂摘み具の石庖丁が使用される。その形態や素材には時期差や地域差が大きい。前期の西日本では外湾刃半月形のものがある。これは半月形の平面形で、弧の部分を磨いて刃部とし、上部の背に近い部分に二つの孔を並行に施し、この孔に紐を通し、指にかけて使用するものである。中期になると瀬戸内東部を中心にサヌカイト製で長方形の打製石庖丁が製作され、近畿地方では結晶片岩製の直線刃半月形のものが増加する。稲の穂摘み具には石製以外にも木製や貝製のものもみられる。収穫具では石鎌が稀に発見される。方形ないしはやや弧を描く形態で、一边に刃部をもつ。石鎌は華北や朝鮮半島北部では、粟・稗などの雑穀の収穫に使用されている。後期になると石製の収穫具以外にも鉄製の手鎌が登場する。

収穫した穀物の脱穀には木製の堅杵や臼が使用されている。

狩猟・狩猟具 (図2—41) の代表的なものとして弓矢・魚労具がある。矢に使用する矢じり(鏃、図2—41・

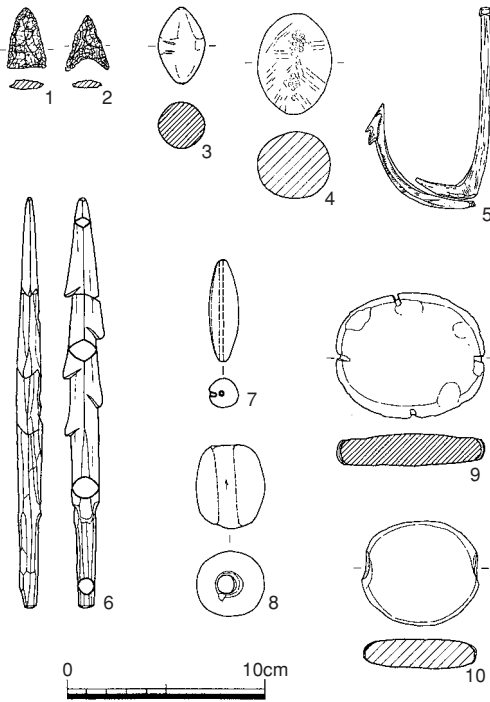


図2—41 狩猟・漁労具

1、2)は縄文時代以来の黒曜石や安山岩系の石材を利用した打製石鏃に加えて、粘板岩や砂岩系の石材を使用した磨製石鏃が新しく作られる。津屋崎町の今川遺跡では銅鏃が出土しており、鉄製の鏃も後期になると増えてくる。弓矢は縄文時代では狩猟具であったが、弥生時代になるとしばしば武器としても使用された。弓矢以外の狩猟具には投弾(同・3、4)がある。長さ四〜六センチの球形ないしは紡錘形をなし、带状又は棒状の器具を使用して投げる弾である。

漁労具には先述したタコ壺の他に釣針や銚・ヤス・魚網の錘・アワビオコシなどがある。釣針は骨角製や金属製のものが

あるが鉄製品は中期からみられる。九州北西部では縄文時代以来、西九州型結合釣針(図2—41・5)と呼ばれる針先と軸を別につくり、それを絡み合わせる形態のものが見られる。銚(同・6)やヤスなど刺突具は骨角製のものが多い。愛知県の朝日遺跡や白浜遺跡など伊勢湾沿岸の遺跡から多く出土している。魚網の錘は石製(同・10)と土製(同・7・9)のものがある。形態は多様で、球形・紡錘形・円筒形・板状などがあるが、土製のものでは中央に孔を穿つものが大部分である。アワビオコシは潜水漁法に用いられる漁具で、アワビなどの岩礁性の貝類を捕獲する用具である。北西九州では前期から骨製ヘラ状のものが用いられている。これら以外にも、釜・梁・タモ網などの漁労具が使用されている。

加工具

各種の道具を製作したり、加工したりする道具(図2—42)で最も数多く使用されているものが、太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧などの石斧の類である。太形蛤刃石斧(図2—42・1)は主として立ち木の伐採用の石斧で、住居や農具・灌漑用材などの多量の木材の生産に必要な石器である。前期末以降、太く大形のものが増加し、福岡市今山遺跡で生産された玄武岩製の石斧は、長さ二〇センチ以上、重さ一・五〜二キログラムもある。扁平片刃石斧(同・4)は木材の加工用具で、長さ五〜六センチ・幅三〜四センチで、厚さ一センチ前後の縦長板状の石斧である。短辺の一つを片側から研ぎだして

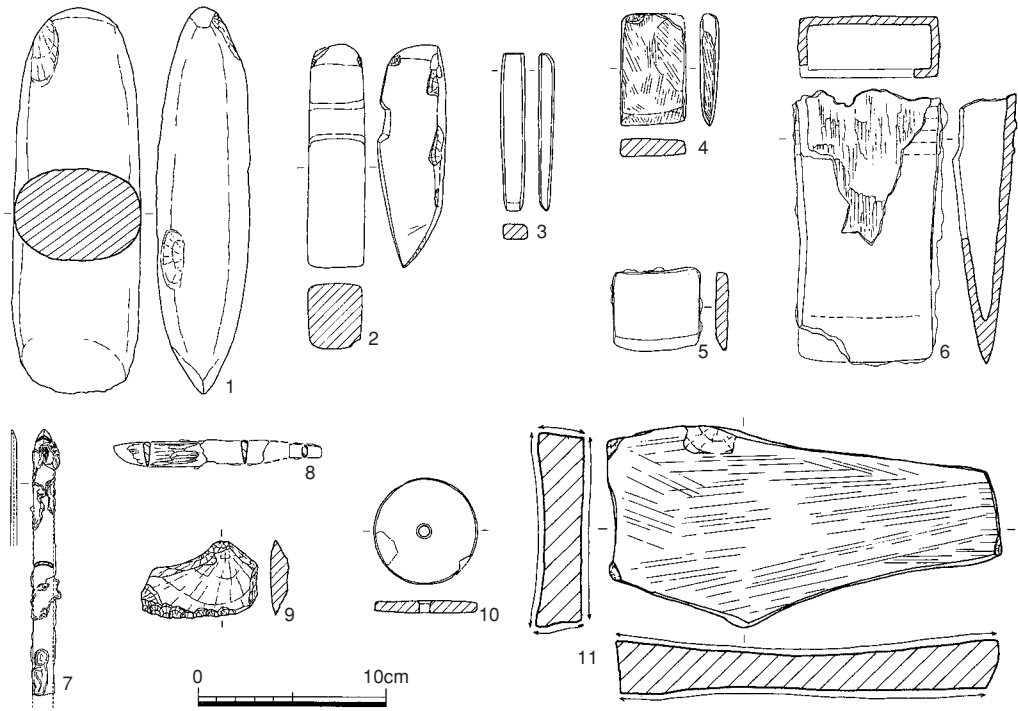


図2—42 加工具

刃部をつくる。柱状片刃石斧(同・3)も加工用具であるが断面が方形の棒状の石斧で、一端にノミ状の刃部がついている。長さ一五〜二〇センチの大形品(同・2)には基部近くにひもで柄に固定するための挟りがある。鉄斧はすでに前期からあり、全体が板状のもの(同・5)と、柄に装着する部分が袋状を呈するもの(同・6)がある。また、ナイフのような用途の石器であるスクレイパー(同・9)は縄文時代以来使用されている。

木材の加工用具には斧以外にも鈍やりがんな(同・7)・刀子とうす(ナイフ、同・8)・鑿のみなどがあり、これらは鉄製品である。また、砥石(同・11)は、金属器や磨製石器などの道具の普及とともに需要が増加した。一定の場所に置いて使用する大形品と、携帯して使用する小形品があり、更にキメの粗いものや細かいものなど用途に応じたさまざまな種類がみられる。

武器

弥生時代の武器には剣・矛ほこ・戈か・刀・弓矢などがある(図2—43)。剣は身の両側に刃を付け、直接手に持って使用する武器である。矛は槍のように棒の先に装着して使用する。戈は長い柄の先端部に現在の鎌のように直角に近い角度で装着する武器である。また、素環刀すかんとう(図2—43・6)という柄の端部が円環状を呈する片刃の武器もある。中国では殷・周の時代に各種の青銅製の武器が製作されていたが、列島内でも前期から輸人品を含めた武器が出土している。銅剣(同・3)・銅矛・銅戈などは前期から中期初頭には細身(細

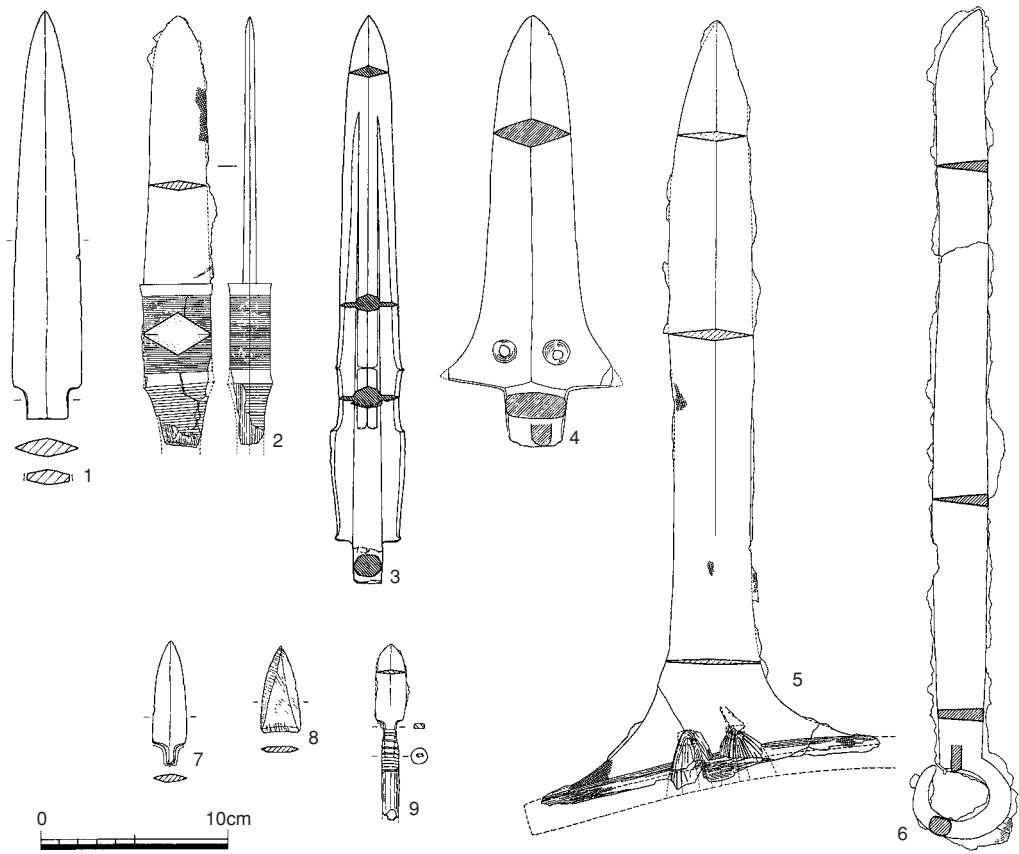


図2—43 武器

形)のものが多く、実戦に使用された武器であり、筑紫野市永岡遺跡の甕棺墓からは切先が刺さった人骨が発見されている。しかし、これらの青銅製武器は中期前半以降になると身の長さや幅が大きく、厚さが薄い中細形が現れ、実用的な武器から祭器へと用途が変化する。鉄製品にも同様に剣(同・2)・矛・戈(同・5)の三種の武器があるが、弥生時代を通じて祭器ではなく実用品であった。また、石製品では石剣(同・1)・石戈(同・4)が実戦用の武器として使用されている。刀は古墳時代に主流となる武器であるが、弥生時代後期にも柄の先端に円環をつけた素環頭の刀がみられる。弓矢は離れた場所にいる敵を倒す武器で、土井ヶ浜遺跡では多数の矢を身に受けた人物の石棺墓が発見されている。矢じりには石製(同・7、8)や金属製(同・9)のものがあるが、金属製のものは後期になると増加し、大形のものがみられる。

衣服と 弥生時代の人々が身につけていた衣服は遺**装身具** 跡の発掘で発見されることはほとんどない。しかし、三世紀に西晋の陳寿が魏・呉・蜀の国の歴史をまとめた『三国志』の中の『魏志倭人伝』には、「倭」つまり列島の弥生時代後期ごろの風俗が記録されている。衣服は「男子……其衣横幅但結束相連略無縫婦人……作衣如單被穿其中中央貫頭衣」とあり、男は「横幅衣」、女は「貫

「頭衣」を普段着ていたことが分かる。この二種の衣服は同じもので、きれのとり方から名づけたものが横幅衣、着方から名づけたものが貫頭衣であると考えられている（武田佐知子『魏志』倭人伝の衣服について―「横幅」衣・「貫頭」衣の位相）『女子美術大学紀要』第一四号、一九八四）。貫頭衣は、幅が広く長い布の中央部を切り裂いて穴を開けるか、又は二枚の細長い布の中央部を残して縫い合わせて作り、穴の部分に頭を通し、前後に布を垂らし、腰の部分で紐を締めて着るものである。この場合、袖がない衣服となるが、太宰府市吉ヶ浦遺跡では上腕骨に布が付着した人骨が発見されていて、袖が付く衣服も使用されていたと考えられている（橋口達也「壙棺内人骨等に附着せる布、蓆」鏡山猛先生古希記念『古文化論攷』一九八〇）。衣服の素材は、北部九州では蚕の繭から採った絹がわずかにあるが、大部分はタイマ・カラムシ・アカソなどの草皮や、コウゾ・カジノキ・フジ・シナなどの樹皮から採った植物繊維であったと推定されている。

頭につけるものについて『魏志倭人伝』では男は「木髻」を頭に巻くとあるが、他にも木や骨で作った堅櫛や簪などを挿したり、木製のヘアバンドや玉類を連ねたものを女性はつけていたと考えられる。飯塚市立岩遺跡では多数の管玉を連ねた豪華な髪飾りが出土している。

首飾りなどのアクセサリーに使用する玉類には管玉・勾玉・

小玉などがあるが、その素材は硬玉・碧玉・貝・牙などのほか、ガラスが使用されるようになる。硬玉の産地は縄文時代以来、新潟県南部から富山県にあり、列島の各地に交易されていた。また、碧玉製管玉も北陸地方で後期以降に盛んに製作される。腕輪は木製・牙製・二枚貝製に加えて、弥生時代には南海産巻貝・青銅・鉄・ガラスなどの製品がみられる。また、銀製・青銅製・貝製・鹿角製などの指輪や、木製の履も発見されている。

祭祀の道具

弥生時代には水稻農耕を開始したが、収穫物である米の多寡は気候に大きく左右される。そのため、ある特定の天候が出現すること又は出現しないことを願う祭祀や、農耕の過程の節目ごとに祭祀が行われたと考えられる。また、『古事記』や『日本書紀』にはイザナギとイザナミが子どもをつくる時、天つ神が「太占」を行い、それに従うと良い子が生まれたとされている。これは古代には人生の節目においても占いが行われたことを物語るものである。

弥生時代の祭祀道具を代表するものに青銅器がある。前期には武器として使用されていた銅剣・銅矛・銅戈などは中期以降身の幅が広く長さのあるものに変化し、実用品ではなく祭祀道具になる。その分布は九州では銅矛（図2-44・1）・銅戈（同・3）、瀬戸内では銅矛・銅剣（同・2）、山陰では銅矛が中心である。後期になると武器形青銅器による祭祀は衰退し、

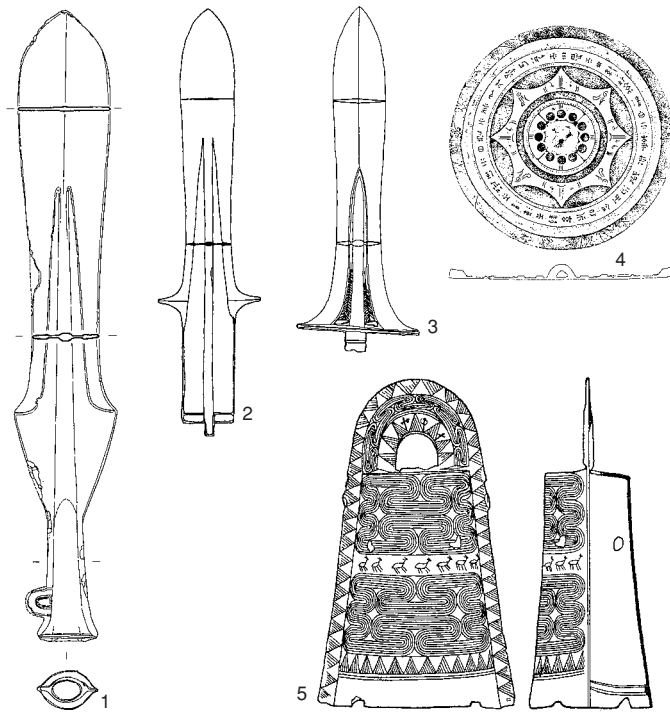


図2—44 青銅製祭祀具

北部九州の広形銅矛と瀬戸内の平形銅剣以外は消滅する。武器形青銅器は一括して地中に埋納されることがあり、島根県荒神谷遺跡では銅鐸六個とともに銅剣三五八本・銅矛一六本が出土している。

釣鐘形の内部に棒状の舌を下げて、揺り動かして音を出す道具を鐸という。馬鐸や風鐸などの種類があるが、弥生時代には銅鐸（同・5）が使用されている。銅鐸は朝鮮半島の小銅鐸が

起源で、前期末から中期に北部九州に持ち込まれたものと考えられている。当初は小形で実際に音を出すものであったと考えられる。しかし、中期から後期にかけて大形化が進み、「聞く」道具から「見る」ための祭祀へと変わる。畿内では中期以降銅鐸が青銅祭祀の中心となる。

もう一つの重要な青銅製祭祀器に銅鏡（同・4）がある。邪馬台国の卑弥呼は中国の魏の景初二年（二三八）に貢物を送り、「親魏倭王」の金印とさまざまな織物などとともに銅鏡一〇〇枚を下賜されている。倭人が銅鏡を特に好んでいたことが分かる。弥生時代の銅鏡の多くは中国からの舶載品で時期ごとにその種類は変遷している。前期末から中期前半では多紐細文鏡、中期後半には方格規矩鏡に代表される前漢鏡がみられる。後期になると内行花文鏡や画像鏡などの後漢や三国の銅鏡が搬入されるが、一方ではこれらの舶載品を模倣した仿製鏡が列島内で生産されるようになる。

これらの青銅製祭祀器が具体的にどのような祭祀行為に使用されたか明らかでないが、これらを手にするには非常な困難が伴い、政治的・宗教的な権威を象徴する道具であったことは確かである。

祭祀道具は他にも墓前祭祀に使用された土器類がある。中期の北部九州では丹塗磨研の壺・高杯・鉢や筒形器台があり、後期後半の山陽地方中部では特殊器台・特殊壺と呼ばれる土器が

首長の墳墓に供献されている。

古代中国では遷都や戦争など国の命運にかかわる重要な事項を決定する際には海亀の甲羅を用いて占いが行われた。列島内でも古墳時代には亀の甲羅を使用して亀卜きぼくが行われていたが、弥生時代には鹿の骨を使った占いがあった（神沢勇一「弥生時代・古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』第三八号、一九七六）。また、中国地方の分銅形土製品や東日本の円板形土製品は護符のような用途が考えられている。

その他 弥生時代にはすでに糸で織った布があったが、その道具 糸を紡ぐ道具に紡錘車ほうすいしゃ（図2—42・10）がある。

直径五ご程度ちゆうどの円板の中央に孔を開け、そこに棒を挿した道具で、繊維に縊よりをかけて糸をつくるものである。吉野ケ里遺跡では絹・麻などの繊維が付着した銅剣が出土しているが、その絹にはアカニシを材料とした貝紫やアカネソウを使用した茜あかねで染めたものがある（前田雨城・下山進・野田裕子「吉野ケ里遺跡出土染織遺物の染色鑑定 科学調査について」佐賀県教育委員会『吉野ケ里遺跡』吉川弘文館、一九九四）。

三 集落と墓地

水田経営に伴う水田の開発や灌漑施設の設置、更には稲の栽培には共同作業が不可欠となる。そのため、弥生人は数軒を単位とした集落を営む。このような数軒の住居と一、二棟の倉庫

からなる「単位集団」が、共同体を構成する基礎単位と考えられている（近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』二二号、一九五九）。弥生時代の集落は生産地としての水田が洪水などの自然災害で放棄されるか又は戦闘行為で破壊されない限り、一定期間同じ場所に継続する傾向が強い。一方では水稲耕作にはまったく適さない地形に立地する集落もある。

集落の種類と施設 水稲耕作を主たる生業として行う集落は、通常しゆじゆの低い丘陵や台地上に立地する。

前期の前半代では単独又は数単位の単位集団が、河川の下流域の低湿潤地周辺に散在して小集落を営むことが多い。後半代になると平野ごとに拠点となる大集落が形成され始める。拠点集落と周辺集落とは水田経営などの生産活動を通して密接に結びつき、人口の増加や生産地の拡大に伴い、この集団から派生した分村的な小集落が河川の中流域へ進出していく。拠点集落では数百ひゃくの敷地に数十軒の住居が建ち並び、一〇〇人以上の人口を抱えていたと考えられる。

環濠集落（図2—45）は縄文時代終末の夜臼式の時期の例が福岡市那珂遺跡や福岡県粕屋町江辻遺跡で調査されている。江辻遺跡では環濠内部の中央に大型建物と高床倉庫が建てられ、その周縁部に松菊里型の竪穴住居が配置されていた。弥生時代前期初頭になると福岡市板付遺跡のように環濠で囲まれた内側